

パワーウォッシュ 京都シンポジウムに寄せて

>>上 朝永 振一郎



あつが、そのような感情をしば
らへむきにおいて、たれ一人とし
てその消滅を望むはずのない人類
の生存のすばらしい種の
成員として反省してもらいたい、
とらうたさる。

戦争それ自身放棄

結いて、人類絶滅を防ぐには、
もはや戦争それ自身を放棄
するほかに道がないことがのべら
れる。すなわち、たとえ水爆不使
用の協定ができたとしても、二た
心戦争が起るなら、そんな協定
は無視され、双方ともに水爆の製
造にとりかかるとなる。なせなら
そのときは作らない方が必ず負
てしまうから、とのべている。
そして最後に、私たちの争いを
高れることができぬからとらう
たさる。私は死をえるのさあ
す、科学者たちがイデオロギーの

この宣言は「私たちは人類が直
面する悲劇的な情勢のなかで、科
学者たちが会議に集まって、大量
破壊兵器の製造の結果として生
じた危険を認識して、互に力を
つなげた精神において海議を
行なった」ということだ。
この宣言は「私たちは人類が直
面する悲劇的な情勢のなかで、科
学者たちが会議に集まって、大量
破壊兵器の製造の結果として生
じた危険を認識して、互に力を
つなげた精神において海議を
行なった」ということだ。

応急策に流れるな 原点、人としての反省

うかどの「私は人類として人類
にうたさる。あなたたがたの人
類性を心にとめて、そして他の
人々をたれよ、もしそれができ
るならば、道は新しい道へむ
かひていこう。もしできない
ならば、死の危険がまわっている
のだから、私たちがこの会議に集
まってきたのは、四十年に及ぶ長
年の宣言は繰り返していい。

この宣言は「私たちは人類が直
面する悲劇的な情勢のなかで、科
学者たちが会議に集まって、大量
破壊兵器の製造の結果として生
じた危険を認識して、互に力を
つなげた精神において海議を
行なった」ということだ。

この八月十八日から九月一日
にかけて京都で第二十五回パワ
ウォッシュシンポジウムが開かれ
る。この会合には約十五カ国の科
学者が参加して「完全核軍縮に向
かう新しいデザイン」という主題
で核兵器廃絶を自覚して討論する
ことになっている。

「危機的状況背景に」
パワウォッシュという名称は多
くの読者に耳なじみがないかも
しれない。しかしこの名称を持つ
会議やシンポジウムの歴史は今
から二十年前にはじまる。すなわち
一九五五年にあらわれた、いわば
「ラッセル・アインシュタイン宣
言」の源をさぐる。

「文化」
朝日・夕刊
一九七五年八月二十七日

この宣言は「私たちは人類が直
面する悲劇的な情勢のなかで、科
学者たちが会議に集まって、大量
破壊兵器の製造の結果として生
じた危険を認識して、互に力を
つなげた精神において海議を
行なった」ということだ。

c092-17-045